



上智大学ヨーロッパ研究所主催上映会

テーマ： 「モルゲン、明日」ードイツ市民のエネルギー革命
冒頭挨拶： 坂田 雅子（監督）
解説： 木村 護郎クリストフ（上智大学外国語学部ドイツ語学科教授）
日時： 2020年11月18日（水曜日）17：20-19：00

冒頭、木村教授は本映画上映の目的について説明した。

- ヨーロッパ研究所が東日本大震災以来行っているヨーロッパおよびドイツのエネルギー政策に関する企画の一つ。
- ドイツのエネルギー転換に至る社会的背景に着目したドキュメンタリー映画を通じて、ドイツエネルギー政策の実情を知る。
- ドイツ市民社会の特質を日本との比較を念頭に置いて鑑賞する。

坂田雅子監督冒頭挨拶

福島原発事故をきっかけに核の時代を問い始めた。原子力というパンドラの箱を開けてしまった人類。私たちはこれからどこへ向かうのでしょうか。福島事故の後、この重大な警告を受けて日本の市民も立ち上がりました。各地で大規模な反原発運動が起こり、節電が始まり、自然エネルギーが動き始め、新しい時代がはじまるのか、という希望が湧いてきました。でも、事故後一年余りで原発の再起動の掛け声が始まり、事故の原因究明もないまま、福島は全て“UNDER CONTROLだ”、というまやかしがまかり通るようになりました。

一方福島から一万キロ離れたドイツは事故の3ヶ月後には、2022年までに原発を全部止める、と宣言しました。私はメルケル首相の決断に感服しました。この違いはどこから来るのだろうか、と私は不思議に思いました。二つの国は様々な点で共通しています。第二次世界大戦での間違った政策、敗戦、それに続く経済復興などです。でも、どこかで大きく道を分かちました。それはなぜなのかを尋ねて、私は三年間で五回ほどドイツに取材にでかけました。

日本で聞く話からはなかなか現実がつかめません。ドイツで再エネが進んでいるというと、典型的な反論は、ドイツはフランスから原発を買っている、汚い石炭火力を使っている、あるいは再生エネルギーは高くつくから先行きは知れている、というようなものでした。一方では、太陽光や水力発電、風力発電などで電力を自給し、売電までしているコミュニティーもあるという夢のような話も聞こえてきます。実情を知りたいと思って、ドイツを縦横に4000キロも駆け巡り、都市で、学校で、村で、あるいは教会で、脱原発、自然エネルギーへ情熱を燃やして実践する多くの人々に会ってきました。

太陽光、水力、バイオガスなど小さなコミュニティーで市民が手作りの発電を行っている実態を観ました。シェーナウという小さな町では、市民が送電線を買って、自分たちの電力会社を作りました。自然エネルギーは着実に根付いていると思えました。それはどうして可能になったのでしょうか。出会った人々は口々に“私たちは戦争中に間違ったことをしたので、権威に盲目に従うことをやめて、自分で考え、行動することを大切にしています”と言います。ここに何かヒントがあるのではないかと思えました。戦争への徹底的な反省、それがドイツと日本の違いではないでしょうか。

ドイツでも戦後すぐに民主主義が発展したわけではありません。それは1968年の学生運動を待たなくてはなりません。これをきっかけに人々はナチスの過去と向き合い、あるべき社会の姿に向き合うようになったのです。そのあるべき姿の中には、反原発そして環境保護も含まれていました。1970年代にはドイツでもいくつかの原子力関連施設の建設計画がありました。そのなかの一つヴィールという小さな村で起こった反原発運動では主婦や農家の人々、それに学生たちが連帯して、原発建設阻止に成功しました。この成功が市民に抵抗する勇気を与え、その後のドイツ各地の反原発、自然エネルギー推進の動きにつながっていったのです。ヴィールで活躍した人たちは私と同じ年代、もう70を過ぎるぐらいですが、多くがその後も継続して環境問題、反原発運動に関

わってきました。彼らの永年の粘り強い努力が実を結んだのです。

日本でも、私や私の仲間たちも 1968 年の学生運動の時代を経験したのですが、あの時の理想や情熱はどこへ消えてしまったのだろうと思うことしきりです。権威に服従しない、自分で考え、自分の足元から始める、過去に目をつぶらず、過去の反省から将来のあるべき姿を倫理的に考える。ドイツを脱原発に導いたのはメルケル首相の力だけでなく 50 年来のドイツ市民の草の根の運動があったからだと思います。日本でも私たちにできることはまだまだあります。小さな一歩が大きな変化に結び付くのです。ドイツの旅は、小さな私たちではありますが、その私たちが世界を変えることができるのだという勇気を与えてくれました。その想いをこの映画を通して皆様と分かち合えたらいいなと思います。「モルゲン、明日」は私たち一人一人が作るのだと思います。

では、みなさん、映画を楽しんでください。

質疑応答

Q：宗教関係者がなぜ繰り返し出てくるのか？

A：ドイツではエネルギー問題は教会において倫理という問題で議論されてきた。（ヨーロッパ研究所叢書「ヨーロッパの世俗と宗教」2019年3月8日発行参照）

Q：ドイツは原子力エネルギーをフランスから輸入しているのではないか？

A：ドイツは再生可能エネルギー生産が増え輸出している。しかし、再生可能エネルギーは不安定であるため、フランスから輸入も行われている。

Q：再生可能エネルギー生産の不安定性について、

A：日本はベースロード（安定した火力や水力をベースとしたうえで、再エネを追加する）、ドイツは再エネをベースに残りを火力等に依存するという逆の発想。

Q：環境と経済のバランスについて、

A：日本では環境と経済は矛盾、対立。ドイツでは再生可能エネルギーに切り替わることで生活も豊かになるという発想。対立して考える発想をやめる。

他

この記録は、上映会当日の録画データに基づき内容をまとめたものであり、記された内容は報告者の発言内容とは細部で異なる場合がございます。なお、本上映会で表明された見解は全て個人的なもので、必ずしも上智大学や当研究所を代表する見解ではありませんので、ご理解・ご了承下さいますようお願いいたします。